



Title	古代中国の彗星予言（前）
Author(s)	串田, 久治
Citation	中国研究集刊. 2001, 28, p. 29-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61214
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古代中国の彗星予言(前)

串田久治

はじめに

自然科学の発達した今日では、日食や月食がどのよに
して起こるかということも、次の日食や月食が地球上の
どの地点で何時何分から観測できるかまで知ることがで
きるが、古代人にとってこれらの現象は人知を越える謎
であった。四季の循環、寒暖の調和でさえ天の配剤と考
える古代人にとって、日食も月食も、あるいは彗星や流
星の出現もすべてが脅威であった。

しかし、天体の運行を観測する者にとっては、予測で
きない日食や月食ではあっても、また彗星や流星が突如
天空を走って人々を不安に陥れようとも、それらを同じ
ように恐れて手をこまねいているだけでは済まされない。
かれらは専門家として納得のいく説明を欲した。

紀元前十二・三世紀の殷王朝、まだ狩猟採集の生活が中
心であったころの亀骨文などにも風雨など天候を伺う記

録が断片的に見えるが、殷の時代にはまだ天文観測には
至っていない。天体を観測し記録するのは周に入ってか
らである。『尚書』堯典に「日月星辰を曆象し、敬みて人
時を授く」とある。これは堯が天文に通じた義和を天文
官とし、太陽・月・星辰を観測して農耕に益ある曆を制す
るように命じたというもので、周王朝にはすでに天文観
測がさなれたていたことを裏付けるものである。また、
『周易』に「仰ぎて以て天文を觀、俯して以て地理を察
す。是の故に幽明の故を知る」(繫辭上)、「天文を觀て、
以て時變を察し、人文を觀て、以て天下を化成す」(賁卦・
象傳)と見えるように、天文は地上のことと共に変化の
法則を知るために欠くべからざる観測の対象と認識され
ていた。「天、神物を生じ、聖人、之れに則る。天地變
化して、聖人、之れに效う。天、象を垂れ、吉凶を見す。
聖人、之れに象る」(繫辭上)とあるように、天の千変万
化が吉凶を示していると考えたからである。要するに、

日月星辰の運行を観測するのは、それによつて四季の変遷を推察するためであり、より客観的な自然の法則を天文観測から獲得しようとする、原始的ではあるが明らかに科学的精神のあらわれということができる。

古代人が自然の法則を知ろうとした時にさまざまな恐怖を経験したであろうことは想像に難くない。天文観測から吉凶を占う行為は、予測を越えた異変や法則に反する現象を目の当たりにした時に生まれる恐怖から逃れようとする意志のあらわれ、不安を解消するための一助として生まれたと見ても大過ないだろう。しかし観測者はその主観を捨てて客観性を求めようとする時、そこにある種の法則を見いだすことになる。その記録の積み重ねが科学的な天文学として発展していったのである。

一方、天文観測から様々な占術が展開したことは中国の天文学の特色でもある。もちろんこのことは中国に限らない。バビロニアのタブレットを持ち出すまでもなく、古代ギリシヤやインドでも同様である。古代人が天体の神秘に対峙した時に生まれる恐怖は普遍的であつたというのである。しかし、中国の占いは実に多種多様で、しかも今日に伝えられていることは特筆に値する。

『周禮』には、保章氏・馮相氏・卜師・筮人・占夢・巫目などの職が見え、かれらが日月星辰の運行を観察して妖祥

を判別し、人間世界の諸事の吉凶を占い、その占いから未来を予見する仕事を担う特殊技術者であつたことがわかる。彼らは日食・月食や五惑星の会合から天下の禍福を占うだけでなく、雲氣や風、あるいは**眡祲**といった太陽の周囲に現れる暈かきの様子などから、諸国の吉凶、作物の豊饒・凶作、水害や旱魃などを占うのである。後世、望氣や風角とも呼ばれるものも含め、太陽・月・星だけでなく、ありとあらゆる自然現象から、果ては占夢のように夢から未来を占うものまで、実に多彩な占術が存在していた。現に『漢書』藝文志には太陽・月・恒星・惑星・彗星・流星の観測記録から生まれた占いの書に並んで、雲・雨・虹蜺暈などの占いの書が記録されている。

さて、『史記』天官書に戦国時代の「天數を傳える者」としてその名を連ねる魏の石申と齊の甘公は、共に天文学の専門的知識をもとに活躍した占星術士である。占星術はすでに戦国時代に盛んに行われていた。漢代には『天文氣象雜占』や『五星占』（共に馬王堆三號漢墓出土帛書）などの占術書が生まれているし、唐には『大唐開元占經』（瞿曇悉達等奉勅撰）が編纂され、そこには先の石申・甘公の占星が多く引用されている。これらの事実から、天文学と占術が時代を越えて受容されていたことがわかる。しかも、『漢書』藝文志は天文観測から吉凶を知ることが

言うのみならず、「聖王の政に参する所以」と、天文が現実政治の反映であること、ゆえに吉凶を見て自らの政治を反省し、凶なれば身を慎み政治を正すことを為政者に求めている。これこそが中国の占いが西洋のホロスコープ Horoscope と違う点である。すなわち、ホロスコープが主として個人の運命を占い予見するためのものであったのに対して、中国の占いは国家や王朝のために生まれた国家占星術 Judicial Astrology として発展したということである。

ただ、占いと予言は同じではない。占いが概ね漠然とした未来を言うのに対して、予言は極めて現実的なことからを具体的に説くものである。そして、予言が占いと決定的に違うのは、占いは占ったことがそのまま意味をもつに對して、予言が予言として認められて人々に記憶されるのは的中した場合に限られること、換言すれば、的中しなければ予言にならないという点である。

ところで、古代人が数ある天文現象の中で、彗星の異常運行と共に最も恐れを抱いたのが彗星と流星であろう。その色や姿、あるいは出現する方位によって、彗星は孛星・拂星・彗星・掃星・天棧・天棣・天棼などと呼ばれ、また流星も天狗・天鼓・枉矢・長庚等々の呼び名があるように、その異名の多さから見ても当時の人々がいかに彗星や流

星を畏怖したかを推察することができよう。

特に彗星は見るからに神秘的で、今日でも彗星の神秘に魅せられる人は少なくない。しかし、今日では彗星を恐れることはないし、ましてやそこに予兆を見ることもないが、古代人は彗星の出現は予測できないだけに恐懼すべき神秘であつた。神秘は想像をたくましくする。彗星は我々に何かを語りかけているのではないかと思う。すると彗星への関心は益々広がる。古代人が彗星に寄せた関心の大きさは、彗星の異名の多さとともにその詳細な観察記録が語っている。

本稿は彗星の記録をたどりながら、そこに記録される言辭の歴史の変遷を整理し、彗星に託された予言から漢代災異思想を管見しようとするものである。

一 彗星の占い

『竹書紀年』には、周王朝第四代昭王の時に「(十九年)春、星、紫微に孛する有り」と、彗星^{注1)}の観測記録が見える。彗星記録の最も古いもののひとつである。しかし、ここには彗星の出現に関して具体的な解説はない。一切の主観を排した天文観測記録と言えよう。

次に彗星の記録が散見するのは『春秋』である。『春秋』

には文公十四年(前六一三)、昭公十七年(前五二五)、哀公十三年(前四八二)の計三回記録されている(注2)。

秋七月、星、孛して北斗に入る有り。(文公十四年)

冬、星、大辰に孛する有り。(昭公十七年)

冬、十有一月、星、東方に孛する有り。(哀公十三年)

彗星を観測した事実を客観的に記録したものである。

「既に見われて後に北斗に入るは、常には有る所に非ず。故に之れを書す」(文公十四年杜預注)、「大辰は房心の尾なり。妖變すること常に非ず。故に書す」(昭公十七年杜預注)と言うように、その尋常ではないことへの驚きとともに記録したものである。ところが、彗星出現を異常とする漠然とした認識は、戦国期の『石氏占』や『甘氏占』(注3)では不幸な出来事を誘発する現象として解説される。

石氏曰く、「凡そ彗星に四名有り。一名孛星、二名拂星、三名掃星、四名彗星。其の状、同じからざるも、殃を爲すこと一の如し。其の出づること三月を過ぎざれば、必ず國を破り君を亂すこと有り。……當に飢旱疾疫の災と爲るべし」と。

石氏曰く、「彗星、西北に出で、本は星に類し、末は

彗に類し、長さ四五尺可^ばりより一丈に至るものを、名づけて天棣と曰う。之れを受く者は大いに亂れ、兵、大いに起る。若し女主ならば憂い有り、大水有り、其の年、民飢う」と。

甘氏曰く、「彗星、其の枝條、長ければ兵と爲し喪と爲す。短かければ水と爲し飢と爲す」と。

甘氏曰く、「彗星、春夏に出づれば飢・水と爲し、秋冬に出づれば、人主自ら兵を將いんと爲し、大喪の若し」と。又た曰く、「冬春に見わるるを小凶と爲し、夏秋を大凶と爲す」と。

破国乱君・飢旱疾疫の災・戦争・大水・飢饉と、いずれも凶占である。これ以外にも、亡国・殺戮・陰謀など、すべてが暗い未来を暗示する。すでに彗星は占星の世界で全き凶星として定着しており、その形状や方位を問わず出現そのものが将来に対する危惧を抱かせていたことがわかる。しかしながら、彗星はその箒状の姿から掃除を連想させ、「凶穢を掃除し、故きを^{はら}い新しきを布く。故に掃星と言う」(『石氏占』)とも言われるように、必ずしも絶望を意味しない。ことごとく凶事を予測させる彗星であるが、同時に古代中国人は不安定な現実社会に対する不平や不満を一掃する可能性を彗星に対して抱いてい

たということ、すなわち、彗星の出現は次に来るべき未来に対する希望をも内包しているということは注目に値する。

彗星に対するこのイメージは漢代も大きな変化は見られない。

彗星は、兵有り。方を得しものは勝つ。

是れを白灌と胃(謂)う。見わるること五日にして去れば、邦に亡ぶる者有り。

是れを赤灌と胃う。大將軍に死す者有り。

蒲彗は、天下に疾あり。

是れ是れ竹彗なり。人主に死す者有り。

是れ是れ蒿彗なり。兵起り、軍幾(饑)う。

以上は一九七三年に長沙馬王堆三号漢墓より出土した帛書『天文氣象雜占』からの抜粋である(注4)。色や形状によつて個別の名称を冠せられているが、帛書に描かれた図はすべて彗星である。いずれも戦国期の占と大差ない。因みに、『石氏占』では「蒲掃見わるれば、兵、境上に起り、軍、戦うも勝たず」とある。ただ二例、豊作の占いが記録されている。しかし、これも実は「是れを穉彗と胃う。兵起り、年有り」、「是れ是れ帚彗なり。内兵有り。年、大いに孰(熟)す」と、戦争や内乱と併記

されていて素直に吉と喜べない占いである。しかも、これらの資料からは彗星が不吉を予測させることはあっても、あまりにも漠然とした占いで現実性に乏しい。

ところで、『晏子春秋』には内篇に一例、外篇に三例の彗星をめぐるエピソードがみえる。いずれも齊の景公と晏子との問答において晏子が諫める話である。そこには当時の彗星観(正確には彗星だけではなく自然の異変)をうかがうことができて興味深い。そもそも史実であるかどうかは疑わしいが、同じ話が『戦國策』や『新序』、あるいは『說苑』などにも見えるだけでなく、王充がそれらに独自の見解を披瀝している点でも無視できない資料である。

公(景公)、西面して望み、彗星を睹る。伯常騫を召し、之れを禳去せしめんとす。晏子曰く、「不可。此れ天教なり。日月の氣、風雨、時ならず、彗星の出づる、天、民の亂るるが爲に之れを見わす。故に之れに妖祥を詔げ、以て不敬を戒む。今、君、若し文を設けて諫を受け、聖賢人を謁せば、彗を去らずと雖も、星は將に自ら亡びんとす。今、君、酒を嗜みて樂に并し、政、飾めずして小人に寛、讒を近づけ優を好み、文を惡みて聖賢人を疏んず。何の暇か彗

に在らん。莒、又た將に見われんとす」と。公、忿然として色を作し、悦ばず。晏子卒するに及び、公、出でて屏して立ち、曰く、「嗚呼、昔者、夫子に従いて公阜に遊ぶ。夫子、一日にして三たび我れを責む。今、誰か寡人を責めんや」と。(内篇諫上第一「景公遊公阜一日有三過言晏子諫」)

景公、夢に彗星を見る。明日、晏子を召して焉れを問う。「寡人、之れを聞く、『彗星有るは、必ず亡國有り』と。夜者、寡人、夢に彗星を見る。吾れ占夢者を召して之れを占せしめんと欲す」と。晏子對えて曰く、「君、居處は節無く、衣服は度無く、正諫を聴かず、事を興して已む無く、賦斂は厭く無く、民を使うこと將に勝えざらんとするが如し。萬民、懟怨す。彗星、又た將に夢に見われんとす。奚ぞ獨り彗星のみならん」と。(同、「景公夢見彗星使人占之晏子諫」)

齊に彗星有り。景公、祝をして之れを禳わしめんとす。晏子諫めて曰く、「益無きなり。祇に誣を取らん。天道は誣わず、其の命を貳にせず。之れを若何ぞ之れを禳わん。且つ天の彗有るは、以て穢德を除うなり。君、穢德無くんば、又た何をか禳わん。若し德

の穢あらば、之れを禳うも何ぞ損せん。詩に云う、『維れ此の文王、小心翼翼たり。昭らかに上帝に事え、率に多福を懷う。厥の德、回まならず、以て方國を受く』と。君、德に違ふこと無くんば、方國、將に至らんとす。何ぞ彗を患えん。詩に曰く、『我れ監みる所無からんや、夏后及び商。亂を用ての故に、民、卒に流亡す』と。若し德の回亂せば、民、將に流亡せんとす。祝史の爲も、能く補うこと無きなり」と。公、説び、乃ち止む。(外篇重而異者第七「景公使祝史禳彗星晏子諫」)

ここでは彗星の出現は君主の死や国の滅亡、あるいは君主としての德の欠如の象徴として認識されている。彗星を見た景公が、たとえそれが夢に見たものであるうとも何とかして「禳去せしめんと」願ったのは、彗星を不吉の星として恐れたことの現れにほかならない。もし彗星を齊の国から追い払うことができるのであれば何としてもそうしたいと思うのは自然の情であろう。同じ不吉の惑星である熒惑(火星)を宋の景公が宋の分野から移動させたのであれば、齊の景公が彗星を齊の国から移すことができないはずはないからである。

しかしながら、それに対する晏子の答えは否定的であ

る。「不可」、「益無きなり」と、いかにもそつけない。それは晏子が彗星の出現を「天教」として、自然の理として受け入れるからである。

確かに彗星は「妖祥」であるが、それは天が「妖祥」を出現させて「以て不敬を戒」め「以て穢徳を除」かんとするものである。すなわち天は「民の亂るるが爲に」景公に知らしめんと彗星を出現させ、「萬民、懟怨する原因が景公の「徳に違ふこと」にあるのだということを深く反省させるために天が示した脅威だと説明している。したがって景公が天の意を理解して「文を設けて諫を受け、聖賢人を謁」し、「徳に違ふこと無く」政治に当たるなら、何も恐れる必要などないと言う訳である。

これが晏子のいう「天教」である。ということとは、彗星は天が地上の人間界に鳴らす警鐘と理解されている。それ故、次の一文に見えるように、彗星も災惑と同じように地上の政治（人君の徳）に反応することになる。

公、慚じて辭を更めて曰く、「我れ國を去るが爲にして死を哀しむに非ざるなり。寡人、之れを聞く、『彗星出づれば、其の向かう所の國君、之れに當たる』と。今、彗星出でて吾が國に向かう。我れ是を以て悲しむなり」と。晏子曰く、「君の行義、回まなる

や、國に徳無し。池沼を穿てば、則ち其の深くして以て廣からんことを欲するなり。臺榭を爲れば、則ち其の高くして且つ大ならんことを欲するなり。賦斂は擄奪の如く、誅僇は仇讎の如し。是れより之れを観れば、蒞、又た將に出でんとす。天の變、彗星の出づる、庸ぞ悲しむ可けんや」と。是に于て公懼れ、迺ち歸り、池沼を寛ぎ、臺榭を廢し、賦斂を薄くし、刑罰を緩くす。三十七日にして彗星亡ぶ。

（外篇重而異者第七「景公置酒泰山四望而泣晏子諫」）

「彗星が向かう國の君主は死ぬのでは」と恐れ憂える景公に、晏子は景公の政治や景公自身の徳のなさを指摘し、今の暴政を改めなければ彗星の凶事は避けられないと説く。先の夢の場合と同様、民の恨みが世に充溢し、そのために天が彗星の変をもたらしたというのである。したがって、もし景公が彗星の出現を恐懼するなら、まずは自ら徳を治めて民の恨みの原因を即座に中止することが求められる。景公が「池沼を寛ぎ、臺榭を廢し、賦斂を薄くし、刑罰を緩く」すると、果たして彗星は消滅したというのである。

このように、彗星出現から得る情報は、『石氏占』や『甘氏占』、あるいは『天文氣象雜占』の漠然とした占いと比

べるとかなり具体的に現実的に説明される。天人相関の思惟方法から彗星出現を仁政の衰退、悪政の応徴と考えるようになるのは極めて自然な推移であろう。『大戴禮』にいう「聖人、國を有たば、則ち日月は食せず、星辰は孛せず、海は運らず、河は満溢せず、川澤は竭きず、山は崩れず、解陵は陴れず、川谷は處まらず、深淵は涸れず」（詒志第七十）は、決して彗星だけが特別というのではないが、彗星もまた日食や河川の氾濫、山崩れなどと同じく、天が君主の徳に反応して自在に操作できる天変地異の一現象として認識されていることを示している。すなわち、彗星も災異のひとつ、君主に下された天の譴責として政治的に機能しているということである。このことは漢代に一層顕著となる。

二 『春秋』に見る彗星予言（一）

『春秋』經文中の三回の彗星記録は三傳によつて大きく展開する。文公十四年・昭公十七年・哀公十三年を三傳及び注によりながら、以下ひとつひとつ考察する。

(1) 文公十四年「秋七月、星、孛して北斗に入る有り」

『穀梁傳』では「孛の言爲る、猶お莠のごときなり。

其の北斗に入ると曰うは、斗、環域有ればなり」と、彗星の觀測記録としての解説である。杜預が「既に見われ而る後に北斗に入るは、常に有る所には非ず。故に之れを書す」と注するように、恐らくこの經の解釈としては彗星出現の異常性を記録するものと解釈するのが最も妥当であろう。しかし、范寧は「大辰、及び東方に孛するは皆な入ると言わざるに據る。此ここに入ると言うは、明らけし、斗に規郭有り、其の魁中に入ること」と言い、更に劉向の言を引いて「北斗は貴星、人君の象なり。莠星は亂臣の類。言うところは邪亂の臣、將に並びに其の君を弑せんとす」と、北斗と彗星はそれぞれ「人君」と「亂臣」の象徴、その彗星が北斗を犯したことは近い將來において「邪亂の臣」による弑君の可能性があると言うかのようなのである。とは言え、杜預や何休が彗星の應徴として挙げる具体的な予占は一切ない。

ところが、『春秋左氏傳』は次のように解説して彗星の予言を提示している。

秋七月……星、孛して北斗に入る有り。周の内史叔服曰く、「七年を出でずして、宋・齊・晉の君、皆な將に亂に死せんとす」と。

彗星が北斗七星の座に侵入するのを観測した後、『左傳』は周の内史叔服の言「七年の内に宋・齊・晉の君主が内乱で弑殺されるであろう」を記して近い将来を予告している。杜預が「後三年、宋、昭公を弑し、五年、齊、懿公を弑し、七年、晉、靈公を弑す」と注するように、確かに經文には「冬、十有一月、宋人、其の君處臼を弑す」（文公十六年）、「夏、五月戊戌、齊人、其の君商人を弑す」（文公十八年）、「秋、九月乙丑、晉の趙盾、其の君夷臯を弑す」（宣公二年）と見え、三年後に宋の昭公、五年後に齊の懿公、七年後に晉の靈公が弑殺された。杜預は「（内史叔服は）但だ事の徴を言うのみにして、其の占を論ぜず。固より末學の詳言を得る所に非ず」と注し、これは占いではなく彗星が示す徴候を言うものだとしている。このことはすでに彗星が占星術を脱して予言に移行していることを示している。

一方、『春秋公羊傳』は「李とは何ぞ。彗星なり。其の北斗に入ると言うは何ぞ。北斗は中有るなり。何を以て書す。異を記すなり」と、あくまで彗星の異を言うだけである。しかし、何休は違ふ。

李とは邪亂の氣、箒とは故きを掃きて新しきを置くの象なり。北斗は天の樞機、玉衡七政の出づる所。

是の時、桓・文の迹息み、王者、政を統ぶること能はず。是れよりの後、齊・晉、並び争い、吳・楚、更、謀り、天子の事を競行し、齊・宋・莒・魯、其の君を弑して立つの應なり。

彗星は箒、古きを掃去して新しきと呼ぶ象徴との旧來の占星を敷衍し、政治の乱れがその後立て続けに起こる弑君の不幸を彗星が予兆していたとするのである。しかも、何休の指摘する弑君は『左傳』の三例にとどまらない。「齊の公子商人、其の君舍を弑す」（文公十四年）、「冬、十有一月、宋人、其の君處臼を弑す」（文公十六年）、「夏、五月戊戌、齊人、其の君商人を弑す」（文公十八年）、「莒、其の君庶其を弑す」（同）、「冬、十月、子卒す^{注6}」（同）である。すなわち文公十四年夏（五月乙亥）に齊の昭公潘が卒すると、その年の九月、昭公夫人叔姬が生んだ舍を桓公夫人密姬の子である公子商人が弑したこと、五年後の文公十八年に齊人は懿公（商人）を弑したこと、三年後の文公十六年には宋人が昭公處臼を弑したこと、また文公十八年には莒の紀公（庶其）が弑され、同じく十八年六月に魯の文公が薨ずると公子赤が弑され宣公が即位したことを彗星の応徴としている。

(2) 昭公十七年「冬、星、大辰に字する有り」

『穀梁傳』『公羊傳』ともに彗星出現に予言的解釈はない。ここでも『公羊傳』の「異を記すなり」や杜預の「妖變すること常に非ず。故に書す」が本来の意と考えられるが、『左傳』は次のように説く。

冬、星、大辰の西に字する有りて、漢に及ぶ。申須曰く、「彗は舊を除く新を布く所以なり。天事は恆の象あり。今、火に除うは、火、出づれば必ず布かん。諸侯、其れ火災有らんか」と。梓慎曰く、「往年、吾れ之れを見たり。是れ其の徴なり。火、出でて見えたり。今茲、火、出でて章わる。必ず火入りて伏せん。其の火に居るや久し。其れ然らざらんか。火の出づるは夏に於ては三月と爲し、商に於ては四月と爲し、周に於ては五月と爲す。夏の數は天を得たり。若し火作れば、其れ四國、之れに當たらん。宋・衛・陳・鄭に在らんか。宋は大辰の虚なり。陳は大皞の虚なり。鄭は祝融の虚なり。皆な火の房なり。星、字して漢に及ぶ。漢は水祥なり。衛は顓頊の虚なり。故に帝丘と爲し、其の星を大水と爲す。水は火の牡なり。其れ丙子若しくは壬午を以て作らんか。水火

の合する所以なり。若し火入りて伏せば、必ず壬午を以てせん。其の見ゆるの月を過ぎず」と。

この年の彗星は大辰(大火星)。心星とも言い、蠍座のα星(アンタレス)の位置に現れ、その光芒が西方の天漢(銀河)にまで達するほどであったことから、申須は諸國に火災が発生するであろうと予言した。更に梓慎は、その火災が宋・衛・陳・鄭の四力國に発生すること、そしてそれは来年の五月壬午の日であろうと言つて申須の予言を補強している。果たして翌十八年五月壬午、同日に宋・衛・陳・鄭の四力國で火災が発生した。「夏五月、壬午、宋・衛・陳・鄭、災あり」(昭公十八年)がそれである。

『公羊傳』は「何を以て書す。異を記すなり」というだけであるが、何休はここに「亦た字彗と爲るは、邪亂の氣、故きを掃きて新しきを置くの象。是の後、周は分かれて二と爲り、天下、主を兩にし、宋は南里もて以て亡ぶ」と注する。これはこの年の彗星が昭公二十二年の事件——周室の分裂を予言していると言うものにはほかならない(注7)。

昭公二十二年夏四月、周の景王が崩御すると周王室に動亂が勃発した。景王の後継争いである。太子の壽が夭逝した後、景王は庶長子である王子朝を愛し、これを王

位に立てようとしていた。これを知った国人は長子の王猛を立てて王(悼王)としたが、王子朝は悼王を攻撃して両者が敵対した。そして、その年の十月に悼王が卒すると、王子丐(王猛の弟)が即位した。これが敬王である。敬王は即位したものの、王子朝が自立したために周の澤という邑での居住を余儀なくされ、「冬十月、天王、成周に入る。尹氏・召伯・毛伯、王子朝を以て楚に奔る」(昭公二十六年)と、即位後四年にしてようやく成周(洛邑)に入ることができた。何休が「周は分かれて二と爲り、天下、主を兩にす」と言う所以である。そして、「是の後」とあるように、この動乱は彗星の「邪亂の氣」の效驗というにほかならない。

『左傳』のいうところは火災の発生という、いわば自然災害の予測である。しかもその予測は七日前(丙子)に融風(立春に吹く東北風)を觀測していること、その風が三日目(戊寅)には一層激しくなったこと、更には梓慎が自ら「大庭氏の庫に登りて之れを望」んで四国の火災を確信したとあるように、雲氣占を想起させることもあることから、『左傳』の説は予言というよりも占いに近い。それに対して、何休はこの彗星出現の数年後に勃発した周王朝の動乱という、まさに政治的事件に結びつけることで、彗星が地上にもたらす神秘の力をことさらに強調

している。もはや彗星は単なる占星術ではなく、予言者として生まれ変わっている。

(3) 哀公十三年「冬十有一月、星、東方に孛する有り」

この年の彗星記録には『左傳』も『穀梁傳』も共に傳文がない。『公羊傳』も、「字とは何ぞ。彗星なり。其の東方に于てすとは何ぞ。且に見わるるなり。何を以て書す。異を記すなり」と、先の二例と同じく異変を記録したとする内容の傳文である。また、杜預と范寧も、「傳無し。平旦(夜明け)、衆星皆な没す。而るに孛乃ち見わる。故に在る所の次を言わざるなり」(杜預)、「孛する所の星を書さずして東方と曰うは、且に方めて字を見、衆星皆な没するが故なり」(范寧)と注するだけで、この彗星の記録に関する神秘的な解釈は一切ない。

しかし、何休は「周の十一月は夏の九月、日は房・心に在り。房・心は天子の明堂、政を布くの庭なり。此の且に於て見われ、日と明を争うは、諸侯、主に代わりて治め、典法滅絶するの象なり。是の後、周室遂に微なり、諸侯相い兼ね、秦の滅ぼす所と爲り、書を燔きて道を絶つ」と、この年の彗星を周王朝の滅亡から秦の暴政までも予測させるものとする。この説明は文公十四年及び昭公十

七年に比べるとお粗末と言わざるを得ないが、彗星が未来を予言するという何休の彗星観は一貫している。

以上のように、『春秋』に見える彗星記録(注8)を通して、漢代の彗星予言の推移をある程度伺うことができる。すなわち、『左傳』よりも成立が早いとされる『公羊傳』と『穀梁傳』においては、彗星は専ら天文の異としての認識、不吉の星として畏怖する対象としての認識であって、太古の占星術の世界である。その登場が最も新しいとされる『左傳』はいかにも予言の様相を見せているようであるが、全般的に占いの域を出ていない。確かに『左傳』文公十四年に見える内史叔服の言辭「七年を出でずして、宋・齊・晉の君、皆な將に亂に死せんとす」は立派な予言と言えるが、これとても何休注に見られるような徹底した後付けがない。また、既に見たように、昭公十七年及び哀公十三年に関しては、何休の説と比べると『左傳』のそれは予言とはほど遠く、まだまだ占いの色彩が濃いものであった。

では、彗星が占いから予言に変貌するのは後漢に入ってから以降のことであろうか。何休が急激な予言化を進めたのであろうか。そこで、次に三傳の後に『春秋』の彗星記録がどのように解釈されたかを『漢書』五行志の解釈を通して検討する。

三 『春秋』に見る彗星予言(二)

班固は、「近世は十二諸侯・七國、相い王たり、從横を言う者、踵を繼ぎ、天文を占う者、時務に因りて書傳を論ず。故に其の占驗は鱗雜にして米鹽、錄す可き者亡し」(『漢書』天文志)と、戦国時代の占驗は乱雑かつ瑣末で記録すべきものがなかったと言う反面、春秋時代は禍福吉凶の現象を詳察し星氣を占うことは国家の一大事であったために、天文を占うことが盛んで記録も正確であると次のように言う。

春秋二百四十二年の間、日食すること三十六、彗星三たび見われ、夜、常星見われず、夜中、星隕^おつること雨の如き者、各、一たび。是の時に當たりて、禍亂輒^おち應じ、周室微弱にして、上下交、怨み、君を殺すこと三十六、國を亡ぼすもの五十二、諸侯の奔走して其の社稷を保つを得ざりし者、數うるに勝う可からず。是れよりの後、衆は寡を暴し、大は小を并す。秦・楚・吳・魯は夷狄なるも彊伯と爲る。田氏、齊を篡い、三家は晉を分かち、並びて戰國と爲り、攻取を爭い、兵革、遽^{たが}いに起こり、城邑、數、

屠られ、因りて飢饉疾疫を以て愁苦し、臣主、共に憂患す。其の祲祥を察し星氣を候うこと尤だ急なり。

〔漢書〕天文志

実はこの一文は『史記』天官書とほぼ同じであり、班固独自の見解というわけではない。司馬遷も班固も、自然現象が人間社会の治乱盛衰に敏感に反応して神秘的な応徴をもたらすのは天の意志であるとする天人相関の思想を受け入れ、自然の異変を詳察して天の意を忖度することの意義を認めているということである。しかし、班固は司馬遷が『史記』に採用しなかった『春秋』の彗星記録を「五行志下之下」に取り上げ、彗星が後にもたらした出来事をことさらに詳述している。もちろん班固の記述は、五惑星の運行や彗星・流星、日月の薄食などの異変は失政があつて初めて現れるもの、その故に「明君は之れを覩て瘖り、身を飭しみて事を正し、其の咎謝を思えば、則ち禍は除かれて福至るは、自然の符なり」（天文志）とあるように、董仲舒以来の災異説に基づいていることと言うまでもない。事実、班固は以下の三例の彗星記録をすべて董仲舒と劉向の見解に基づいて説を展開している。

(1) 文公十四年「七月、星、孛して北斗に入る有り」

董仲舒は「孛とは惡氣の生ずる所なり。之れを孛と謂うは、言うところは其の孛字として妨蔽する所有り、闇亂不明の貌なり。北斗は大國の象。後に齊・宋・魯・莒・晉、皆な君を弑す」と言い、劉向は「君臣、朝に亂れ、政令、外に虧けば、則ち上は三光の精を濁し、五星 羸縮し、色を變えて逆行し、甚しきは則ち字と爲る。北斗は人君の象、孛星は亂臣の類、篡殺の表なり」と言う。兩者ともに彗星を亂の象徴とし、人君の象徴たる北斗を犯したことは乱臣による弑君として表れたとしているが、董仲舒も劉向もこの彗星が未來を予言するものとの意識は希薄である。また、董仲舒は「後に齊・宋・魯・莒・晉、皆な君を弑す」と、『左傳』と何休注とを併せてこの彗星の応徴としている。ところが班固はこれを更に拡大して解釈する。

夫れ彗星、較然と北斗の中に在るは、天の人に視すること顯かなり。史の占有ること明らかなるに、時に君は終に改瘖せず。是の後、宋・魯・莒・晉・鄭・陳の六國、咸な其の君を弑し、齊、再び弑す。中國、既に亂れ、夷狄、並びに侵し、兵革、從横し、楚は威

に乘じ勝に席り、諸夏に深入して六たび侵伐し、一たび國を滅ぼし、周室に觀兵す。晉は外に二國を滅ぼし、内に王師を敗り、又た三國の兵を連ねて大いに齊師を牽に敗り、亡げるを追ひ北げるを逐ひ、東のかた海水に臨み、威は京師を陵ぎ、武は大齊を折く。皆な彗星の炎の及ぶ所、流れて二十八年に至る。

天は彗星を北斗に出現させて人間に反省を促したのであるが、時に君主はそれを悟ることなく、その結果、宋・魯・莒・鄭・陳の六國に弑君が、齊にあつては二度にわたつて君主殺害が起きたとする。

齊(文公十四年)・宋(文公十六年)・莒(文公十八年)・魯(文公十八年)・晉(宣公二年)の弑君に關してはすでに見た。班固はそれに「鄭の公子歸生、其の君夷を弑す」(宣公四年)、「陳の夏徵舒、其の君平國を弑す」(宣公十年)を加えるだけでなく、齊にあつては昭公の死後に齊君となつた舍が商人(桓公の子で昭公の弟)に殺され、四年後にはその商人(懿公)が殺されるという、度重なる弑君の事實を強調する。更には宣公十二年・十三年・十四年、成公二年・六年と、立て続けに起きた六度に及ぶ楚の侵伐行為、楚の周王朝に対する武威の誇示、そして楚による蕭の滅國(宣公十二年)などの事實をことごとく列記し、そ

れらがみな文公十四年の彗星の應徴である指摘する。「皆な彗星の炎の及ぶ所、流れて二十八年に至る」とは、文公十四年(前六一三)の彗星が成公六年(前五八五)までの二十八年間に影響を及ぼしたというものである。

(2) 昭公十七年「冬、星、大辰に孛する有り」

董仲舒・劉向、ともに『左傳』の火災發生説はとらない。董仲舒は「後、王室大いに亂れ、三王分れて爭う。此れ其の效なり」と、この時の彗星は景王の没後に起きた周室での動亂——王子朝・王子猛(悼王)・王子丐(敬王)の三王の王位繼承争いとして應徴があつたとする。劉向は、この場合は彗星が大辰の心宿に侵入しており、それは「天子の適庶、將に分れて爭わんとするに象る」と解釈し、その應徴は五年後の王室の混乱であると董仲舒の説を襲っている。しかし、すでに明らかなように、これは後に何休が『公羊傳』で解説するところと全く同じである。『漢書』の記述を信頼するならば、董仲舒は何休の解釈を先取りしていたということになる。

また、班固がここに『左傳』の説を紹介はするが、それは宋・衛・陳・鄭の火災を言うためではないことは注目に値する。

時に楚は彊く、宋・衛・陳・鄭、皆な南のかた楚に附く。王猛、既に卒し、敬王即位し、子鼂（朝）、王城に入り、天王、狄泉に居し、之れを敢えて納ること莫し。五年、楚の平王居卒し、子鼂、楚に奔り、王室、乃ち定まる。後、楚、六國を帥いて吳を伐ち、吳、之れを雞父に敗り、其の君臣を殺獲す。蔡、楚を怨みて沈を滅ぼす。楚、怒りて蔡を圍む。吳人、之れを救い、遂に柏舉の戦を爲し、楚の師を敗りて郢都を屠り、昭王の母を妻とし、平王の墓に鞭うつ。此れ皆な李悝の流炎の及ぼす所の效なり。

このように、班固は「李悝の流炎の及ぼす所の效」は周王室の混乱のみならず、宋・衛・陳・鄭——『左傳』が火災發生国と予測した四国——が諸国に侵犯を繰り返す強國楚に付き従ったことの過ちが、ついに楚が柏舉の戦い（定公四年）で大敗を喫することとなって現れたとする。そして、「天星、既に然り、四國、政を失するに相い似たり。王室の亂を爲すこと皆な同じ」との劉歆の言でこの解説を結んでいるように、彗星が宋・衛・陳・鄭の四国にもたらした效驗は火災ではなく、王室における嫡庶の争いと同じように宋・衛・陳・鄭の失政に結びつくと言うのである。

(3) 哀公十三年「冬十有一月、星、東方に孛する有り」

董仲舒・劉向以爲えらく、「宿の名を言わざるは、宿に加わらざればなり。辰を以て日に乗じて出づるは、亂氣、君の明を蔽えばなり。明年、春秋の事、終す。

「この年の彗星が日の出に太陽に乗って現れたのは、亂氣が君主の明哲を覆い隠したことにはほかならない」とは、董仲舒と劉向との共通認識であると班固は言う。そして、明くる哀公十四年に『春秋』の記録が幕を閉じるのは、まさにこの「君の明を蔽」うことの意であるとする。

すでに見たように、何休はこの彗星を「諸侯、主に代わりて治め、典法絶滅するの象なり。是の後、周室遂に微なり、諸侯相い兼ね、秦の滅ぼす所と爲り、書を燔きて道を絶つ」と、周王朝の滅亡から秦の暴政までを予言するものと概観するだけであつたが、班固は「明年、春秋の事、終す」ことの意味を具体的な応徵をもって説明する。

東方に出づるは、軫・角・亢なり。軫は楚、角・亢は陳・鄭なり。或いは角・亢は大國の象、齊・晉と爲すなりと

曰う。其の後、楚、陳を滅ぼし、田氏、齊を篡い、六卿、晉を分かつ。此れ其の效なり。

分野説では東方に彗星が現れたのは軫・角・亢の星宿に当たる。軫宿は楚、角宿・亢宿は鄭の分野である。また一説によると角宿・亢宿は大国の齊と晉。従つてこの彗星は楚・齊・晉に應驗が見られると言う。すなわち、楚は「秋七月己卯、楚の公孫朝、師を帥いて陳を滅ぼす」(『左傳』哀公十七年)と陳を攻め滅ぼしたこと(前四七八年)、齊は春秋の姜齊が康公を最後に田和に篡奪されて戦国の田齊に交代したこと(前三七九年)、晉は六卿(韓氏・魏氏・趙氏・范氏・中行氏・智氏)によつて牛耳られ、前五二六年に昭公が没すると晉の公室は弱体化して六卿はいよいよ強大となり、ついに晉は韓・魏・趙に三分割されたこと(前三七六年)がこの彗星の效驗であるとする。

『春秋』が絶筆となる哀公十四年(前四八二)は、齊の平公十三年、まさに晉の出公八年。春秋の齊が滅びたのは二十五年間在位した平公が没して後七十年、晉の靜公が韓・魏・趙に滅ぼされたのは十七年在位した出公が没して後八十年、かくて齊も晉も公室は絶えたのである。

このように、『春秋』に記録される彗星の事例から、占星は前漢から後漢にかけて単なる占いを脱し、天文現象

を政治的な事件に結合させることによつて予言化して行つたことがわかる。確かに、太古の占星術が次第に政治的予言に変容して行つたのは、もともと国家占星術として展開した中国の占星術の当然の帰結であろう。しかしながら、そこには古来不吉の彗星として恐れられた彗星に天の意を読み取ろうとした古代人の合理性を見ることが出来る。天文の神秘を脅威として恐れ、彗星がもたらすであろう災禍から免れることだけをひたすら祈るものではない、神秘は神秘として受け入れながらも、実際に納得できる説明を試みるという知的作業が営まれていたのである。それが漢代神秘思想の合理性であろう。

そこで、次に漢代に発生した彗星記録に対してどのような社会的・政治的意味付けをしたかということを『史記』『漢書』『後漢書』を中心に検討し、前漢から後漢、そして三国に至る神秘思想の実相を探ることにする。

(以下、次号に続く)

付記 本稿は平成十一・十二・十三年度科学研究費基盤研究(C)(2)による研究成果の一部である。

注

(1) 一般に彗星の尾(箒)の短いものを孛、長いものを彗と区別して呼んでいる。「字は彗なり」『春秋左氏傳』文公十四年注)、「字とは何ぞ。彗星なり」『春秋公羊傳』文公十四年、昭公十七年・哀公十三年)とあるように、孛は彗と同一視されている。天文学では厳密には区別されるべきものもあるが、ここでは一般的に彗星として扱う。なお、『説文』は両者を挙げ、段玉裁は「字」に「穀梁に曰く、字の言は猶お莠のごときなり。莠とは艸多きなり。凡そ物盛んなれば則ち亂れ易し」と言う。

(2) 哀公十四年の「(冬) 星、字する有り。饑う」は『左傳』だけの獲麟の後の記録であるため、ここでは対象にしない。

(3) ここに引く『石氏占』及び『甘氏占』は、すべて『大唐開元占經』卷第八十八「彗星占 彗星名狀占」所引のものである。『開元占經』は宋代に一度散逸したことがあるため無条件には信頼できないが、新城新藏はその著『東洋天文學史研究』(弘文堂書房、一九二八年)において、「唐初に於ける石氏甘氏の星經を再現することが出来る」と断言している。

(4) 『天文氣象雜占』の彗星記録をもとに漢代の彗星観を紹介したため、Michael Loewe, "THE HAN VIEW OF COMETS", The Museum of Far Eastern Antiquities Bulletin No. 52 (Stockholm 1980) がある。

(5) 癸惑に関しては拙書『中國古代の「謠」と「予言」』(創文社、一九九九年)第五章を参照されたい。

(6) 『公羊傳』文公十八年に「子卒者孰謂。謂子赤也。何以不曰。隱之也。何隱爾。弑也。弑則何以不曰。不忍言也」とあるように、これは魯における弑君の事実にはかならない。

(7) 後述するように、何休のこの解釈は『漢書』五行志下之下による限り董仲舒の説を踏襲したものということになる。

(8) 『左傳』にのみ記載される彗星記録が二例ある。哀公十四年の「(冬) 星、字する有り。饑う」と、昭公二十六年傳文に見える齊の景公のエピソードである。前者は杜預も「傳無し。在りし所を言わざるは、史、之れを失すればなり」と注するだけで、彗星出現とその後に記される飢饉との関係にも言及しない。また、後者については『晏子春秋』と殆ど同じく、「穢^はれを除う」彗星を借りて景公の不徳を批判するものである。